

第 54 回一志会例会 レポート

2019 年 10 月 21 日

一志会は、「公の精神」のもとに積極的に社会的責任を果たそうとの想いを共有する大企業経営幹部の「コミュニティ」ですが、10 月 21 日に第 54 回例会を開催しました。

今回は、ゲストとして生井俊重氏（株）TBS テレビ社長室顧問、元（株）ビーエス・アイ（現：BS-TBS）代表取締役社長）をお迎えして、「裏から見た日本の経営史ー私の歩んだ軌跡」と題したご講話をいただきました。



生井氏は、1967 年慶應大学経済学部を卒業、（株）石川島播磨重工を経て、1969 年に（株）東洋経済新報社に入社し、辣腕経済記者として活躍。1991 年、（株）東京放送が報道局報道センターを新設する際に、経済担当部長として入社、以後、経営企画局長兼 BS 推進局長、取締役就任などを経て、2002 年（株）ビーエス・アイ（現：BS-TBS）代表取締役社長に就任。2009 年（株）TBS サービスの取締役会長などを歴任し、2017 年から現職。経済評論家としてテレビでコメンテーターなども務めました。一柳とは、官僚時代からのお付き合いです。

講師 生井 俊重 氏

生井氏は、まず学生時代の恩師である高村象平塾長とのエピソードから話を始められ、東洋経済新報社の経済部記者として活躍する中で、身近に接した財界人・経営者の生きざまを縦横無尽に語られました。ちなみに、高杉良著『勁草の人 中山素平』（文春文庫）の中で「週刊東邦経済」のエネルギー担当記者として活躍する《高井重亮》は、生井氏がモデルとされており、生井氏がいかに深く取材し、時には当事者と一体となって重要な役割を果たしたか、の一端が描かれています。

生井氏は、薫陶を受けた一番の人物として、戦後日本の産業構造構築に大きな役割を果たし、「財界の鞍馬天狗」と称された中山素平氏（元日本興業銀行頭取、会長）を挙げられ、海運再編成や新日鉄誕生、NTT の民営化、続いての国鉄民営化、石油資源開発など、大きな国家的プロジェクトで《黒子役》を務めた功績を評価されるとともに、《人の話をよく聞いた》、《忍耐力があり、しぶとい》、《決断力がある》人物と表現されました。そして、それぞれのプロジェクトにかかわった多くの財界人・経営者や政治家などとの折衝・神経戦について拝聴していると、まさに今、目の前で展開されているような迫力を感じました。特に、中山氏をはじめ当時の財界人や政治家には《突破力》があったが、最近は、《ひ弱になった》との指摘には、聴講者には大いに考えさせられるところがあり、生井氏の生々しい話に圧倒されました。



この後、会員スピーチで、野村・興和取締役常務執行役員から「多角化の歴史とコーポレート戦略」と題して、1894年の創業以来、環境変化に応じて業容を拡充してきた125年間の動きと今後の取り組みについて説明をいただきました。

続いて、生田・ミクニ社長、清明・マネックス証券社長、竹内・BEENOS取締役、伊藤・西日本電信電話代表取締役副社長、一柳・ハウス食品グループ本社経営役、山中・ラック常務執行役員、菊池・日本政策投資銀行代表取締役副社長、坂本・パラマウントベット常務取締役から、それぞれ近況報告がありました。

その後も、ゲストの生井氏を囲む輪が続き、いつものように和気藹々に談笑が続く中、予定の時刻を迎えました。



野村 保夫 氏



生田 久貴 氏



清明 祐子 氏



竹内 拓 氏



伊藤 正三 氏



一柳 和文 氏



山中 茂生 氏



菊池 伸 氏



坂本 郁夫 氏